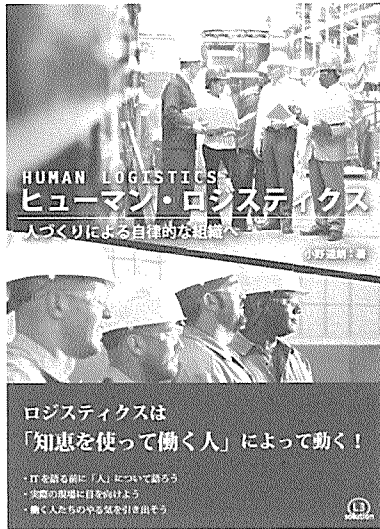


副会長と福本秀爾理事長、日本バス協会の高橋幹会長と梶原景博理事長、全国タクシー・ハイ

ヤー連合会の富田昌孝会長と神谷俊広理事長。

小野達朗氏の著書「ヒューマン・ロジスティクス」が発刊

「ロジスティクスに関わる人材育成」が主なテーマ



人間こそ、企業が健康であり続けるための土台となるのである――。富士ファイルムグループで物流子会社の社長を務めた小野達朗氏の著書「ヒューマン・ロジスティクス」が17日、エル・スリー・ソリューション（本社・東京都港区、樋口恵一社長）から発刊された。A5サイズで、税抜1500円。小野氏は日本ロジスティクスシステム協会（JILS）から「ロジスティクス経営士」の認定を受けており、著書では「経営システム」にふれながら、企業経営における「ロジスティクスの位置づけ」「ロジスティクスに関わる人材育成」を主なテーマとして描き、物流子会社の社長としての成功体験のほか失敗談についても紹介している。

第1章「『物流』のイメージは？」では、ロジスティクスの概念、物流業の位置づけを説明。著書を執筆するきっかけのひとつとなった、2011年3月11日の東日本大震災におけるライフラインの復旧に必要な資材輸送を支えた「使命感を持った人間の力」を強調している。第2章「ロジスティクスを経営の基軸に！」では、経営システムと経営品質を物流の事例をまじえながら説明。サプライチェー

ンをマネジメントの中心に据える重要性やIT化を背景とした働き方の変化にも触れ、サプライチェーンを構成する各企業の働く人のやりがいや満足の重要性を強調している。

第3章「『見える化』で強い企業をつくる」では、企業間格差は「現場力」にあるとの持論を展開し、「問題の答えは現場にあり、現場を起点として全体を見て、現場から問題点を引き出し、自らが答えを出すことで、企業は変わることができる」と指摘。第4章「物流業の環境変化を考える」で様々な環境変化を説明した上で、第5章「ロジスティクスの人材強化」で人事戦略の重要性やロジスティクスに求められる人材育成について紹介。第6章「ヒューマン・ロジスティクス」では、自律的な組織を動かす人間を育て、大事にする経営システムを目指すのが「ヒューマン・ロジスティクス」であると結んでいる。

小野達朗（おの・たつろう）氏 1948年秋田県生まれ。70年プロセス資材（富士ファイルムグローバルグラフィックシステムズ）に入社後、2001年共同物流を図り、物流子会社ビーポート（現エファール）を設立。2005年同社社長に就任。06年に共同物流の推進が「グリーン物流パートナーシップ推進モデル事業」に認定された。物流周辺事業を拡大するため、社名をFFGSビジネスサポートに変更。11年物流事業を富士ファイルムロジスティクスに移管。社長を退任し、12年にヒューマンロジスティクス研究所を設立。